郷土館発
昔の医療の様子

前号で、天然痘への対策である種痘について紹介しました。

安政三年（一八五六）山崎譲平が津具近在の者に種痘をほどこす。（津具の天然痘の記録は安政二年から残っている）

この時代に北設で種痘がどのくらい行われていたか調べてみました。

東栄町の菅沼昌平が、文化十五年（一八一八年）に自分の子どもに種痘を施したという記録が残っており、東三河地方で初めてのものと分析されています。

また、旧三輪村（東栄町）では、明治十二年（一八七九年）に「種痘台帳」がまとめられており、安政二年から明治十一年までの種痘の状況三百二十九人分の記録が残されています。

（東栄町誌）

豊根村にも、元治元年（一八六四年）に種痘を行った医師の記録が残されています。

（前文略）種痘御望の旁早朝より四ツ時迄に小児同道予が宅に来り玉へ診察して治療いたし可差上候

元治元年甲子三月十六日より

大和国藩医増田法橋二男

当住三州黒川邨　増田英達

（豊根村誌）

江戸末期、奥三河の地で先進的なワクチン利用が行われていたことに、驚きを覚えます。種痘を行った医師たちは、どこでどのように学んだのでしょうか。

山崎譲平は岡山県の難波抱節の門下生となり牛痘法の伝授を受けています。

（文化したら平成二十年三月）

菅沼昌平は、飯田や京都で勉強した後、遠州浜名の阿部玄岑（げんしん）医師から種痘方法の伝授を受けました。

（東栄町誌）

豊根の医師については、明らかになっていないようです。

幕末頃の奥三河において、ヨーロッパから伝わって間もないワクチン接種が行われていたことに驚きを覚え、この地方の医療の歴史と新しいことを学ぼうとする思いの深さを感じます。

この種痘と同じく先進的な医学の歴史がありました。それは、明治九年（一八七六年）司馬凌海が津具で行った病理解剖です。

（文化したら平成二十年三月）

司馬凌海は、長崎で蘭学を学び、日本へ近代医学導入の基礎を築いた人です。その凌海が愛知県に雇われ名古屋にいた時、県に命じられて駕籠に乗り二泊三日をかけて往診のため津具に向かいました。しかし、到着した時にはすでに患者は死亡していました。凌海は症状等から考え、子宮外妊娠と判断し、今後の医学のため解剖を申し入れ、家族にも了承されました。剖検の結果、子宮外妊娠が確認されました。この剖検は、愛知県における最初の病理解剖であるだけでなく、日本人による病理解剖の第一号例となりました。

ではこのような凄い人がなぜ津具のような寒村に往診を命ぜられたのでしょうか。ここには津具出身の医学を学ぶ山崎珉平の存在がありました。珉平は上津具の人で、父親の謙吾は医師であり里長（村長）でもありました。また、種痘を紹介した内容にあった山崎譲平の親戚でもあります。この珉平が医学を学んだ師の近藤担平が司馬凌海と同門であり、父親担平の活動と共に珉平の師との関係もありました。様々な人脈が働いて往診が実現したのではないかと思われます。

種痘・病理解剖など、当時において先進的な医学の活動が奥三河の地で行われていたことと共に、それを担った人々が学びのため遠隔地まで出かけていたことがわかりました。そして、その学びが地域の人々のためになったことはもちろんのこと、その精神は現在にも受け継がれていると考えられます。

（奥三河郷土館長　渡邉　俊也）